

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT
2018.1. VOL.35

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

和 お知らせ
Information

ミッドタウンクリニック名駅と 健康増進等を目的とした共同研究を開始

2017年10月、名古屋駅前のJPタワー5階に、医療法人社団ミッドタウンクリニックが運営する健診センター「ミッドタウンクリニック名駅」が開設されました。(リゾートトラストグループである株式会社アドバンス・メディカル・ケアが運営支援)開設に伴い、同クリニックと当院との間で健康増進等を目的とした共同研究を開始することとなりました。同クリニックで得られる健診データを利用し、当院が予防医療などの健康増進を目的とした研究を実施します。また、同クリニックとは地域医療連携についても推進させていきます。

さらに、同医療法人から本学医学研究科に対して寄付講座の申し出があり、医療人育成学講座として2018年4月より開設することになりました。

共同研究開始に伴う覚書締結式



左:ミッドタウンクリニックの草野敏昭理事長
右:本学の郡健二郎理事長



受付



待合室



充実の検査設備



JPタワー

THE世界大学ランキングで 国内13位にランクイン

イギリスの高等教育専門誌「THE (Times Higher Education)」は、2017年9月5日に「THE世界大学ランキング2018」を発表しました。「教育」「研究」「研究の影響力」「国際性」「産業界からの収入」という5つの分野について世界の大学が評価され、本学は国内13位(同率)にランクインしました(世界では601-800位)。

日経グローバル「大学の地域貢献度に関する 全国調査2017」で東海地域1位にランクイン

日本経済新聞社が発行する「日経グローバル」は、2017年11月6日に全国748の国公私立大学を対象にした地域貢献度調査結果を発表しました。地域貢献を支える組織の有無や制度面の整備状況、企業や行政との連携など4分野33項目について2016年度の活動実績が評価され、本学は東海地域(※)1位にランクインしました(全国では15位)。

※愛知県・岐阜県・三重県・静岡県

“瑞医の由来”

「瑞医(ずい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

連携病院

三重北医療センター

平素より、当センターの運営ならびに診療につきまして、格別のご配慮ご指導をいただき、心から御礼を申し上げます。

2017年4月1日より、JA三重厚生連 いなべ総合病院と菰野厚生病院は、統一名称「三重北医療センター」を付して、新たにスタートいたしました。いなべ総合病院(220床、22診療科)は、急性期を中心とした医療を提供し、初期臨床研修指定病院として次世代の医師育成にも積極的に取り組んでまいりました。一方、菰野厚生病院(230床、18診療科)は、菰野町の基幹病院として急性期医療から慢性期医療、健診、在宅・福祉部門まで幅広い地域医療ニーズに対し、包括的に応えていくことを使命として今日まで歩んでまいりました。

しかしながら、超高齢社会の到来を迎え、国は地域完結型の医療提供体制の構築を目指し、医療の機能分化・集約を推進しております。また、三重県北勢地域においても、医療需要は益々増加すると推計されており、両病院としても今まで以上に密度の高い医療を提供できる体制整備が喫緊の課題となっております。

このような中、医療の質を担保し、地域医療を充実していくためには、限られた医療資源をより効果的に活用することが不可欠であり、両病院が一体となって、機能連携を強化することは必然の流れでありました。今後、両病院が緊密に連携して双方の特徴を生かしつつ、弱点を補完し合う診療体制を構築することにより、400床規模の病院にも匹敵する医療センターとなるよう全力で取り組んでいく所存でございます。

三重県北勢地区西部において、当センターが将来にわたり地域医療の中心的な役割を担っていけるよう、これからも努力する所存でございますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



竹山センター長



いなべ総合病院



菰野厚生病院

研究

論文等表彰式を開催



-論文プラス1受賞者の皆さん-
前列左から平野先生、郡学長、
村井先生(その他は他学部の教員)



-高インパクト論文受賞者の皆さん-
前列左から藤岡先生、
郡学長、濱本先生
後列左から1人目が澤本先生、
5人目が安井先生
(その他は他学部の教員)

2016年5月31日に文部科学省の科学技術・学術審議会学術分科会において「学術研究力強化について」の議論がなされました。大学の研究力をどう測るかについて3つの指標が提案されています。つまり、量(論文数、被引用数)、質(トップ1%論文数と割合)、厚み(論文の集積、研究者数、国際性)です。本学では量的・質的な研究活動活性化のアクションとして論文プラスワン運動・高インパクト論文表彰を進めています。今回選ばれた方々はこれらのふたつの点のいずれかへの貢献度を高く評価されました。村井太郎先生(放射線医学分野助教)の一連の研究は放射線治療の手法の最適化とその臨床応用への取り組みです。平野佳男先生(視覚科学分野講師)は眼疾患の病態解明と新たな治療法開発への挑戦的な研究です。藤岡哲平先生(神経内科学分野助教)と澤本和延先生(再生医学分野教授)は脳卒中後の神経細胞が移動する機序を世界に先がけて明らかにしました。濱本周造先生(腎泌尿器科学分野講師)と安井孝周先生(腎泌尿器科学分野教授)は腎結石の治療において内視鏡と手術を組み合わせることで従来法の困難な課題を克服することに成功しています。各研究者のご理解とご協力のもとに本学でもこれらの指標が一定レベルより高く維持されることが期待されます。

医学研究科副研究科長(研究担当) 酒々井 眞澄

日本神経化学大会への参加報告

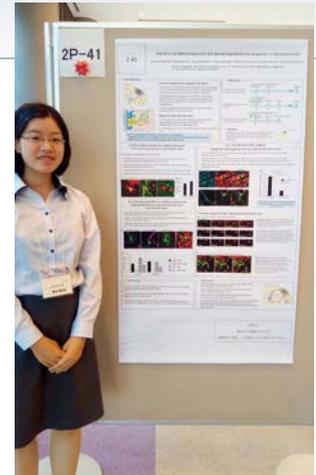
2016年度の基礎自主研修中に開始した脳傷害後のグリア細胞の再生過程の研究の成果を、2017年9月に仙台で行われた第60回日本神経化学大会にて”Migration and differentiation of V-SVZ-derived oligodendrocyte progenitors in the injured cortex”という演題でポスター発表をさせていただきました。

学会中は、様々な研究発表や講演を聴講するだけでなく、全国各地から参加された同分野の研究をされている先生方とお話する機会も頂き、自身の研究の弱点や可能性を実感することができ、さらに学んでいきたいという思いが強くなりました。また、異なる分野や研究施設で研究されている方々のお話も非常に勉強になりました。

基礎自主研修から学会発表までを通して研究することの楽しさを知り、また研究成果を全国の研究者に向けて発表する場を与えて頂いたことは、非常に貴重な経験となりました。この経験が活かせるように精進していきたいと思います。

最後になりましたが、学会発表を進めるにあたりご指導・ご協力を賜りました再生医学分野の先生方、学会参加費・旅費を全面的にサポートして下さった大学に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

医学部4年生 橋本 真耶佳



研究室紹介

先進急性期医療学

先進急性期医療学は2015年9月にスタートした救急医学を研究対象とする分野です。笹野寛教授、服部友紀教授と私を含めた3人の診療担当教授と大学院生1人が所属しています。この分野の目標は、社会構造の変化や社会の新たなニーズに合わせ、この地域の大学および大学病院として救急の診療だけでなく教育・研究を充実させ、救急医療に携わる人材を育成することです。この目標と救急医療で地域に貢献するという大学病院の目標のもと、まずは病院の救急科として、救命救急センターの診療の充実を図ることに重点を置いて参りました。

その中で大きな変化は救急専従医の24時間体制です。当初、救急専従医による救急患者の対応は平日の日中に限られており、夜間・休日は各診療科に救急車対応をお願いしていました。この体制から徐々に救急専従医による対応時間を拡大し、現在は、5人の救急専従医(内4人は救急専門医)が、週末(金、土)の夜間以外、交代で24時間体制の診療を行っています。救命救急センターとして、重症から軽症まで様々な病態、背景をもつ患者が搬送されますが、救急専従医が診断と初期対応を行った上で各診療科へ引き継ぐことにより、各診療科に過剰な負担をかけることなく大学病院の専門知識・技術を動員した救急医療が実践できていると思います。その効果は昨年度(平成28年度)の救急車搬入件数5,386件、三次救急患者837人と重症患者の受入れ数の増加につながり、その患者に対する急性期治療の増加にもつながっています。救急専従医が受入れの窓口となり「断らない救急医療」を実践した結果ですが、この地域における当院への潜在的な要望に応えた結果でもあります。一方、救急患者の増加により、院内のハード面、ソフト面に大きな負荷もかかっており、今年度は救急外来の改修工事とスタッフの増員も検討して頂きました。

このように、これまでは救急医療を当院の一つの柱として充実させることに邁進してきましたが、今後は先進急性期医療学として診療にとどまらず、救急医学の研究、教育を推進することが次の課題です。年々増加する救急搬送に応えながら、日々の診療で生じる疑問、課題に対し、臨床医学および社会医学の視点から答えて参ります。

救急医学を対象とする先進急性期医療学を今後ともよろしくお願い致します。

教授 松嶋 麻子



左から服部教授、松嶋教授、笹野教授

新任教授紹介

薬理学分野— 大矢 進 教授

この度、2017年9月1日付で薬理学分野の教授を拝命いたしました。

私は、1992年に名古屋市立大学薬学部を卒業し、大学院博士課程に進学しました。1995年より本学助手として採用され、2005年に助教授(准教授)に昇進し、教育、研究に励んで参りました。その間、2000年に博士(薬学)の学位を取得し、2001年から1年間、米国ネバダ大学医学部生理学講座にて研究する機会に恵まれました。2012年4月には京都薬科大学薬理学分野の教授に着任し、教育、研究に加え、分野主任として研究室運営に携わりました。

私の研究課題は「イオンチャネル(特に、カリウムチャネル)の分子薬理学研究」です。イオンチャネル作用薬は、循環器病治療薬や糖尿病治療薬をはじめ、中枢神経系疾患、アレルギー性疾患、炎症性疾患、癌の治療標的としても期待されています。実際に、カリウムチャネル活性化薬は高血圧症、気道過敏症、排尿困難、勃起不全、癲癇の治療薬として、カリウムチャネル阻害薬は多発性硬化症、関節リウマチのような自己免疫疾患や大腸癌・乳癌をはじめとする癌の治療薬として期待されています。

学生達がこれまで育んできた自立心をさらなる向上心に結び付けられるよう、薬理学の講義、実習、研究を通じて次世代の医学教育、研究の実現にチャレンジしたいと思っております。微力ではありますが、本学の発展のために尽力する所存でございますので、今後ともご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



大矢 進 教授

研究者紹介

実験病態病理学分野— 鈴木 周五 講師

専門：発がん病理学、動物実験

留学後、名古屋市立東部医療センターで病理医として勤務する傍ら、当教室で研究を行ってききましたが、2017年10月から講師として勤務することになりました。発がん機序の解明やがん予防、治療薬の開発などに対して、主に動物実験を用いた発がん研究を行っております。細胞培養などin vitroで得られた結果が、動物を用いたin vivoで証明出来ないことも多々あり、日々苦労しつつも動物実験はヒトへの外挿も含めた重要な研究だと自負しております。今現在まで、前立腺や肝臓に対する発がん研究を主に行ってききましたが、今後は留学先のネブラスカ大学メディカルセンター・コーエン先生の研究室で行っていた膀胱にも着目し、本格的に研究を取り組んでいきたいと思っております。

【近年の論文】Toxicol Pathol 2017;45:544-50. Int J Mol Sci 2016;17:2071. Cancer Res 2016;76:4192-204. Carcinogenesis 2015;36:1539-49. J Toxicol Pathol 2015;28:21-6. Cancer Sci 2013;104:1711-7. Toxicology 2013;311:115-23.



鈴木 周五 講師

耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野— 讃岐 徹治 講師

専門：喉頭科学、経鼻頭蓋底手術

私の主な研究テーマは、発声障害の診断と治療方法の開発と音声外科、内視鏡下鼻副鼻腔手術、経鼻頭蓋底手術の臨床です。

痙攣性発声障害は、「局所性ジストニア」の一種と考えられ、喉頭筋の痙攣様異常運動により発声中の声の詰まりや途切れ、震えをきたす原因不明の難治性疾患です。

現在のところ本症に対する根本的な治療はありません。チタンブリッジを用いた甲状軟骨形成術2型は、発声時に内喉頭筋が不随意的、断続的に強く内転することで声門が過閉鎖し症状が発現することに着目し、発声時に声門が強く内転しても声帯が強く閉まらないように甲状軟骨を正中に切開し、両側甲状披裂筋の附着部を甲状軟骨ごと外側に広げて固定する術式で、臨床経験から有効性が報告され、手術成功に必要な新規医療機器チタンブリッジの薬事承認と治療法の普及を目的に開発を行っております。



讃岐 徹治 講師

【近年の論文】
Auris Nasus Larynx 43, 537-340, 2016.
Laryngoscope 127 (1):159-166; 2017.
Otolaryngology-Head and Neck Surgery
In Press, Auris Nasus Larynx In Press

研究者紹介

次世代医療開発学分野 — 神谷 武 教授・臨床研究開発支援センター長

専門分野：消化器内科学、消化器心身医学、治療評価学、レギュラトリーサイエンス

私の主な研究テーマは「機能性消化管疾患」と「レギュラトリーサイエンス」です。

「機能性消化管疾患」は、胃食道逆流症、機能性ディスペプシア、過敏性腸症候群に代表され、慢性的な腹部症状を主体とする機能的な疾患群の総称で、その患者数は非常に多いものの、日本ではまだ研究者数が少ない領域です。私は消化器内科医として、その病態・治療の主体となる内臓知覚、消化管運動、プロバイオティクスの研究に、消化器代謝内科学、機能組織学の先生方とともに取り組んできました。

一方「レギュラトリーサイエンス」とは、科学技術の成果を的確に予測、評価、判断を行い、人と社会に役立てる科学のことで、医療分野では医薬品、医療機器、食品、生活環境等が対象になります。私は2013年～2015年の2年間、医薬品医療機器総合機構(PMDA)で臨床研究、薬事行政を含むレギュラトリーサイエンスについて学ぶ機会をいただきました。そして現在は、臨床研究開発支援センターの運営を担っております。今後は専門の消化器内科領域では「機能性消化管疾患」の基礎的研究とあわせ、PMDAでの経験を生かし、その治療評価法の確立と新規治療法開発に向け臨床研究をすすめる予定です。さらに質の高い臨床研究の推進、新しい医薬品・医療機器や医療技術の研究開発に取り組むという大学病院の使命を果たすため、臨床研究開発支援センターの体制強化に努め、「臨床研究の強化による新しい医療の創出」という本学の未来プラン実現、医療の発展と高度な医療提供に少しでも貢献したいと考えています。



神谷 武 教授

【近年の論文】

J Clin Biochem Nutr 60:130-135 (2017),
J Gastroenterol Hepatol 31: 334-341 (2016)
Digestion 91: 99-109 (2015),
J Gastroenterol 50: 11-30 (2015),
Evid Based Complement Alternat
Med e828137 (2014),
Neurogastroenterol Motil 26: 950-961 (2014)

臨床研究開発支援センター — 福田 英克 准教授

専門分野：循環器内科学、心機能・心不全学、レギュラトリーサイエンス

私は名古屋市立大学医学部を卒業後、循環器内科医として臨床、研究、教育に従事して参りましたが、2015年7月より2年間、医薬品医療機器総合機構(Pharmaceuticals and Medical Devices Agency: PMDA)の医療機器審査部に医系審査専門員として勤務する機会を頂きました。医療機器にはメスやピンセットなどのリスクの低い機械器具から冠動脈ステントや心臓ペースメーカーのようなリスクの高い機械器具まで含まれますが、PMDAの医療機器審査部ではハイリスク医療機器を中心に治験前から薬事承認まで一貫した体制で指導や審査を行っています。有効性・安全性の評価手法がある程度確立された医薬品とは異なり、医療機器の素材、動作原理、使用環境、リスクレベル等の多様性が、医療機器を体系的に評価することを困難にしています。このため医療機器審査部には工学、理学、薬学、獣医学、臨床医学等の様々な分野の審査専門員が在籍しており、優れた医療機器を効率的に医療現場に提供するために、各々の専門性を活かして治験相談や承認審査を行っています。医系審査専門員は、当該医療機器について、臨床的意義、リスク・ベネフィットバランスの妥当性、医療現場への適応性等を医師の立場から判断し、他の審査専門員と協議します。

PMDAに勤務する機会を頂いたことで、医療機器の承認審査のみならず薬事行政全般についても学ぶことができたことは私にとって大きな財産となりました。今後は、この経験を活かし、本学発の革新的医療の開発支援に貢献できればと思います。どうぞ宜しくお願い申し上げます。



福田 英克 准教授

【近年の論文】

Heart Fail Rev. 2017; 22:657-664.
Heart Fail Rev. 2017; 22:775-782.
Int J Cardiol. 2017; 228:4-10.
Int J Cardiol. 2016; 214:301-6.
Eur J Prev Cardiol. 2016; 23:78-85.

最新の放射線治療機器「トモセラピー ラディザクト」をアジアで初めて導入

放射線医学の進歩はとても速く、5～10年の間隔で新たな機器が次々と生み出されてきます。そのような状況の中で、これまで当院は積極的に最新機器を導入し、最高水準の放射線診療を確保してきました。今回は当院が持つ最新鋭の放射線機器の中から、2017年10月にアジアで初めて導入した高精度放射線治療専用機TomoTherapy Radixactをご紹介します。

トモセラピーはX線の照射ガントリーが回転し、かつ患者ベッドがスライドしながら放射線治療がなされる最高のピンポイント放射線治療装置です。当院ではすでに2012年に導入されていますが、「ラディザクト」は、その後新開発された機器の中で、現時点では最新・最高バージョンのトモセラピーです。この装置の特長の一つは治療の高速化で、従来の装置に比べて治療時に身体を静止する時間が短くなるため、患者さんの負担を軽減させることが可能になります。もう一つの特長が治療精度のさらなる向上であり、治療した部分にどの程度の放射線が照射され、その効果について詳細に把握することができるため、より現状に合った治療を行えるようになります。

放射線治療はこの10数年の間に著しく進歩しました。いくつかのがんでは全く切除することなく、手術と同等(以上)に完治させることができるようになってきました。ただし、このようながん治療に到達するには最先端の装置とそれを使いこなす優秀なスタッフが必要です。当院は、その両方を備えたがん放射線治療の最先端病院と言えます。がんが悩まれる患者さんは、一度当院放射線科で相談を受けられることをお勧めします。



放射線医学 教授 芝本 雄太

再生医療-培養表皮移植-を開始

再生医療は、病気や外傷で損なわれた器官や組織を再生するために、細胞や組織を体外で培養や加工して体に移植する医療です。iPS細胞や臍帯血由来幹細胞などが話題になっておりますが、既に自家培養表皮・自家培養軟骨・骨格筋由来細胞シートは公的保険が適用され、一般臨床現場に普及しています。

なかでも、自家培養表皮は切手大の皮膚から数週間ではがき大のシートが何枚も作製でき、広範囲の重度のやけどや生まれつき体に大きな黒褐色のあざの治療を向上させています。しかし、自家培養表皮はこれら2つの疾患以外に保険適用になっていません。一方で、白斑・改善が困難な瘢痕・難治性皮膚潰瘍は従来の方法で治療が困難な皮膚疾患で、特に広範囲の病変では有効な治療法がないのが現状です。

そこで、当院では「再生医療等安全性確保法」に則り、学内研究倫理審査委員会および特定認定再生医療等委員会審査の承認のもとに、白斑・改善が困難な瘢痕・難治性皮膚潰瘍に対して、培養表皮移植による臨床研究を形成外科と皮膚科と共同で2017年7月から開始いたしました。

本臨床研究では、衣服で隠れる部位などから切手大の皮膚を採取し、再生医療に関する製品製造などを手掛ける「株式会社ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング」(愛知県蒲郡市)で3～4週間シート状に培養して当院で移植手術を行います。

当院の先進医療支援費制度のサポートを受け、患者負担は約50～100万円程度となりますが、現在数名の顔や手の白斑の患者さんに移植を行い、経過をみております。当院では約20件の治療を実施後、保険外併用療法が適用される先進医療として厚生労働省に申請する予定です。承認後は複数機関で先進医療として有効性と安全性を検討し、最終的には保険適用につなげたいと考えております。



培養表皮シート



表皮シートの培養風景

形成外科学 教授 鳥山 和宏

学生生活

教養のキャンパス UNSWの学生と(左)
A Taronga Zoo 留学生と(右)



ニューサウスウェールズ大学選択制臨床実習

1ヶ月間、UNSW(University of New South Wales)のPrince of Wales Hospitalの感染症内科で実習させていただきました。実習を通じてよかったと思うことは大きくわけて3つありました。1つめは自分で考え自分から動く習慣が身についたことです。2つめは海外の医学生を実際にみることができたこと。1年のうちからBSLを行い、下級生でも高い臨床能力をもっていました。3つめとしては、留学を通じて自分の将来について見つめ直すきっかけを与えてもらうことができました。貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。

医学部6年生 加藤 大志

UNSWのThe St.George Hospital Cancer Care Centerで実習させていただきました。ここはThe St.George Hospitalに併設されているクリニックで、温熱療法で有名な腫瘍内科と放射線治療科があります。この実習で腫瘍内科と緩和ケア科を経験できてよかったです。また、後期研修の先生方と多く交流ができモチベーションもあがりました。様々な症例を見ることができたので、実習や卒試・国試の勉強にも役立ちました。「自分が担当医だったら」「患者さんのために何ができるか」をじっくり考えることもできました。

医学部6年生 上谷 綾祐美

私はUNSWの関連病院の一つであるPrince of Wales病院の呼吸器内科で臨床実習を行いました。UNSWの拠点キャンパスから一番近い病院ということもあり、医学生が多くtutorialなどが充実しており良かったです。この病院では紙カルテと電子カルテのダブル使いをしており、紙カルテの綴り字を読むのに難渋しました。最も勉強になったのは、身体診察です。毎日午前中いっぱい回診に費やし丁寧に診察を行っていたのが印象的でした。先生方や学生に助けられて、中身が濃く刺激的な毎日を過ごすことができました。

医学部6年生 木村 理沙

私はSt.George Public Hospitalの循環器内科にて4週間の病院実習を行う機会を頂戴しました。基本的に学生は各チームの回診につき、internやregistrarの指示に従ってカルテ記入を行い、必要があればルート確保、動脈採血を行います。患者さんも学生に処置されることは慣れており、私も採血をさせていただいた時には患者さんに励まされたり、アドバイスをいただいたり、学生の教育に非常に好意的なのが印象的でした。ここでしか経験できない貴重な体験を多くさせていただき一生の財産となりました。

医学部6年生 安井 由希子

男子ゴルフ部が西日本医科学生総合体育大会(西医体)で優勝



8月16～18日に広島カントリー倶楽部八本松コースで行われた男子西医体において、本学ゴルフ部が優勝をしましたので、そのご報告をさせていただきます。

ゴルフ部が男子西医体に優勝するのは初めてのことです。現役部員はもちろんのこと、OB、OGの先輩方にとっても悲願の初優勝になったことと存じ上げます。

OB、OGの先輩方とは新年会などを通して毎年、年に数回程お会いする機会があるのですが、その度に優勝に対する熱い想いを聞かせていただきました。そういった想いが受け継がれて、私達現役部員も毎年強く優勝を意識してきました。多くの先輩方が築いてきたゴルフ部が幾度となく優勝の壁に跳ね返され、その度にもう一度決起次の大会での優勝を目指し奮起してきた歴史の中でやっと優勝を手にした喜びはとても大きなものです。

昨年は女子も西医体で優勝しております。男女ともにレベルが高く、着実に本学ゴルフ部は強くなってきています。この流れを絶やさず、さらに強いゴルフ部になり、来年もまた良いご報告が出来るように現役部員一同切磋琢磨し部活動に励みたいと思っています。

最後になりますが、私達ゴルフ部は顧問の今井優樹先生をはじめ、多くの方々に支えられて活動することが出来ています。この場をお借りしまして、心より御礼を申し上げます。

医学部3年生 月井 陽介

すべての妊婦さんの枕を、一つも二つも高くするために!

2017年8月26日(土)に千葉大学病院で開催されました第3回ALSO Japan学術集会で、当院の太田優美助産師(写真)が代表して発表した分べん産科医療センター(分べん部門)の取り組みに関する口演「愛知県内の救急救命士に対する病院前分娩再教育講習会の開催効果の検討」が最優秀演題賞をいただきました。2012年より救急救命士への助産教育に取り組んでおり、その成果が全国に認められたことになります。この「愛知システム」を今後全国展開することが次なる目標です。乞うご期待!



高度医療教育研究センター・産科婦人科学 尾崎 康彦

ハニャン 漢陽大学(韓国)と学部間交流覚書を締結



2017年10月26日(木)、医学研究科が韓国の漢陽大学と学部間交流覚書を締結しました。漢陽大学はソウル市に所在する総合大学で、韓国ではトップレベルの大学です。当日は、漢陽大学医学部のホ・スン・チョイ医学部長を含む教員3名が医学研究科を訪れ、締結式を行うとともに両大学の研究・教育活動の紹介や、附属病院及び滝子・田辺通両キャンパスの見学を行うなど相互理解を深めました。

なお、締結後は共同シンポジウムを開催するなど活発な交流活動を計画している一方、今年3月には研究科長を含む教員5名が漢陽大学を訪問し、大学間交流協定への更なる拡大のために現地にて交渉を行う予定としています。

名古屋市立大学×名古屋学院大学×名古屋工業大学 文部科学省「未来医療研究人材養成拠点形成事業」

平成29年度 地域と育む未来医療人「なごやかモデル」公開シンポジウム～いつまでも自分らしく暮らせるまちづくりを進めよう～

12月9日(土)に、桜山キャンパスさくら講堂にて「なごやかモデル」の公開シンポジウムが開催されました。本年度は「なごやかモデル」最終年度にあたり、本プロジェクトの総括となるシンポジウムとなりました。連携大学の学長挨拶の後、厚生労働省の佐々木昌弘課長による、これからの医療人教育の方向性についての講演があり、本プロジェクトの重要性と先進性を評価いただきました。会場には、本年度医療系学部連携授業で学生達が作製した活動報告のポスターが展示され、学生からの説明が来場された地域関係者、一般市民の方々に行われました。後半では、本学と同様に医療系学部による多職種連携教育を進めている千葉大学の上原孝紀先生から、千葉大学で行われている取り組みのご紹介があり、「なごやかモデル」の成果も連携3大学の担当教員より報告がありました。最後に、上原先生と成果発表担当教員で、今後の医療人教育についてのパネルディスカッションを行い、地域医療に貢献する医療人養成推進の現状と課題について論議し、本プロジェクト継続の必要性が再確認されました。



ひとこと☆メッセージ 募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!無沙汰している同級生に、恩師に…ワイワイ楽しいお便りお待ちしております。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたいと思います。

例えばこんな一言を、

研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」
 ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」
 新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」
 などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は9月号です)

1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) *匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8602 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地 名古屋市立大学 医学・病院管理部
 経営課経営係 広報担当宛 E-Mail:hotnews@med.nagoya-cu.ac.jp

お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません

広報誌：瑞医(ずい)
 発行：〒467-8602
 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地
 TEL (052) 858-7114 FAX (052) 858-7537

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp/>

※次号の発行は2018年5月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]

☐☐
 我こそは
 通信員!

広報誌「瑞医」へ最新的话题をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、E-Mail:hotnews@med.nagoya-cu.ac.jp
 医学・病院管理部経営課経営係 広報担当まで